令和六年度

岡山白陵中学校入学試験問題

国語

受験番号	

注意

一、時間は五〇分で一〇〇点満点です。
二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
三、開始の合図があったら、まず問題が一ページから二一ページまで順になっているかどうかを確かめなさい。
四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に数えます。

一

次の各問いに答えなさい。

問1　次の①～⑩の文中にある――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 私の町のトウケイを見ると、出生数は年々減少していることがわかる。

② 彼(かれ)は勉強を済ませると、ケイカイな足取りで部屋を出ていった。

③ 村の祭りのユライを調べるために図書館へ行った。

④ セイセイＡＩを活用して楽曲を作った。

⑤ 彼の会社では年功ジョレツ制度を見直し、新しい評価制度を導入する。

⑥ 会議の冒頭(ぼうとう)で、提案のコッシを述べた。

⑦ 人々の募金(ぼきん)によって城はシュウフクされ、美しい姿を取り戻(もど)した。

⑧ 新設校のサッカー部がハチクの勢いで連戦連勝し、ついに決勝戦を迎(むか)えた。

⑨ 法によるサバきを受け、彼は罪をつぐなうことを決意した。

⑩ 彼女(かのじょ)は気持ちを落ち着かせ、神棚(かみだな)に水と米をソナえた。

問2　次の⑴～⑸についてA～Cの（　　）に当てはまる表現を後の語群ア～エの中から一つずつ選ぶとき、どれにも**当てはまらない表現**が一つあります。それはどの表現か、それぞれ記号で答えなさい。

⑴
A　友人はすぐにでもお金を貸してくれと迫ったが、そんな大金は（　　）貸せるものではなかった。
B　嘘をついていたのがばれてしまい、彼は叱られることを恐れて（　　）母親を見上げた。
C　翌朝、小鳥が巣の中で動かなくなってしまっているのを見て、彼女は（　　）泣き始めた。

⑴の語群　ア　さめざめと　イ　おずおずと　ウ　おいそれと　エ　おめおめと

⑵
A　彼女は入院している祖母に会いたくなって、祖母の写真を（　　）眺めた。
B　試合が間近に迫り、彼は緊張から食事をとれなくなり（　　）頬がこけた。
C　姉が選んでくれた新しい靴は、不思議なことに私の足に（　　）馴染んだ。

⑵の語群　ア　しっとりと　イ　げっそりと　ウ　しんみりと　エ　しっくりと

⑶
A　台風による災害から再興した山間の小さな町の温泉街は、観光客が訪れるようになり（　　）。
B　山の頂上にたどり着くと、朝日に照らされた岩壁の美しさに圧倒され（　　）。
C　テレビ会社の会長の（　　）俳優を選んだのは、映画制作の資金集めのためだと噂された。

⑶の語群　ア　息が掛かった　イ　息を潜めた　ウ　息を吹き返した　エ　息を呑んだ

(4)

A　「いい天気だね」と彼女に突然話しかけられた僕は、「いい天気だね」と（　　）に答えるのが精一杯だった。

B　人間の都合で自然を破壊し続けると、後でとんでもない（　　）を食らうことになる。

C　登場人物の中で、最も周囲の信頼が厚かった彼が犯人だなんて、とんだ（　　）だ。

(4)の語群　ア　おうむ返し　　イ　巻き返し　　ウ　どんでん返し　　エ　しっぺ返し

(5)

A　結婚式に着ていく服を探したが、派手すぎたり地味すぎたりする服ばかりで（　　）だ。

B　福引きで大型テレビが当たったが、彼の狭い家にはすでにテレビが二台あり（　　）であった。

C　健康を害した父に、喫煙をやめるように話してみたが、結局は（　　）だった。

(5)の語群　ア　無用の長物　　イ　枯れ木も山の賑わい　　ウ　帯に短し襷に長し　　エ　暖簾に腕押し

このページに問題はありません。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「準備が大変だと思います。ぼくは中受を控えてるから、授業時間を減らされるのは困ります」
真面目男子が意見する。
「なるほど。そのへんのことはどう考えてますか？」
小野田がおれに振る。
「授業には支障が出ないようにします。学級活動の時間内や放課後に準備したいと思っています。もちろん塾や習い事がある人は、そっちを優先してくれてかまいません」
忍だって中学受験組だ。支障があったら困る。
「でも実際、今日の五時間目の理科の授業をこんなことに使ってるじゃないですか」
うぐっ、と言葉に詰まる。
「すまんすまん。それは先生が決めたことなんだ。今日の理科の授業はどこかで必ず埋め合わせをするから」
トランクスが謝った。かすかなブーイングは、今日の理科の授業がなくなって喜んでいる連中だろう。
「他の反対意見ありますか？」
小野田が仕切る。
「はい」
と、女子が手をあげた。
「わたしは、人がたくさん死んだ戦争の話なんて聞きたくありません。そんな怖い話をわざわざ聞きたくないです。悲しい気分になるし」
クラスが一瞬しんとして、そのあとざわついた。おれも思わず忍と宇太佳の顔をすがるように見てしまった。そんな意見が出るなんて、びっくりしたのだった。

「なるほど。貴重なご意見をどうもありがとうございます。もしかしたら、戦争の話を聞きたくない人が、他にもいるかもしれません。それについてはどう思いますか？」
聞きわけのいい、つまらない司会者のようにまとめて、小野田がこっちを見た。おれは反射的に目をそらした。なんて答えたらいいかわからない。実のところ、内心ムカついていた。聞きたくない、ってなんだ？　大勢の人が亡くなった戦争じゃないか。怖い？　悲しい？　その場にいなかった人間がなに言ってんだ！
「①正直な気持ちを教えてくれて、どうもありがとうございます」
忍が頭を下げた。おれの顔を見て、拓人じゃ無理だと思ったんだろう。賢明だ。
「戦争では大勢の人が亡くなりました。兵士だけではなく、一般の人たちもたくさんです。軍人が二百三十万人、民間人が八十万人亡くなったと推定されています。尊い命が次々と消えていきました。民間人というのは、ぼくたちのことです。ぼくたちや家族が戦争に巻き込まれて死んだっていうことです」
「だから、それは昔のことで、今のわたしたちとは関係ありません。日本はもう戦争しないでしょ。憲法第九条に戦争放棄について記載されています」
怖い話を聞きたくないと言った女子が、忍に反論する。憲法九条？　戦争放棄？　難しい話になってきた。ついていけない。
「いや、戦争に参加する可能性はあります。可能性がゼロなんてものはこの世にない。現に自衛隊はイラク戦争に派遣された。人道復興支援活動ってことだけど、現地でどんなことがあったのかはわからないだろ。集団的自衛権だってそうだ。日本が攻撃されなくても、海外での自衛隊の武力行使ができるようになっちまった。憲法九条なんて意味ねえじゃないかよ」
忍の顔が赤い。口調が悪くなったのも、興奮したせいだろう。忍の言ったことは、おれの知らないことばかりだった。
「……なによ、そんな言い方しなくてもいいでしょっ」
「ちょっとちょっと、ケンカはやめてください！」
小野田があせったように仲裁に入る。

「冷静に話し合いをしましょうよ。ねっ」
わざとらしい笑顔で小野田が首を傾げた。
「あの！」
無意識のうちに声が出た。
「あのさ、戦争のことも大事だけど、おれはただ田中さんのことを知ってもらいたいんだよ。花林神社の管理人をしているおじいさんのことを、一人でも多くの人に知ってもらいたいんだ。田中さんは、おれたちと同じ歳だったときにお母さんと妹さんを空襲で亡くした。そんなのって、ちょっと想像つかないだろ？　急に家族がいなくなったんだよ。それって、確かに怖いし、悲しいことだけど、田中さんはそれからの人生、一生懸命生きてきたんだ。田中さん、すっごくいい人でさ。おれも年をとったら、あんなおじいさんになりたいって思った。そんな田中さんのことを、みんなに紹介したいんだよ。それだけなんだよ」
②クラスがまた一瞬、しずかになった。ヤベ、やっちまったか、と思ったすぐあとで、
「いいね、その通り」
と、宇太佳が言って、
「だな」
と、忍が続けた。
それからまた少し話し合いがあった。真面目男子は、勉強が遅れないならいいと言い、戦争の話を聞きたくないと言った女子は、田中さんの人生の話ならと、了承してくれた。
「他に、田中さんに講演してもらうことについて反対の人、いますか？」
小野田の問いかけに、手をあげる生徒はいなかった。
「では、花林神社の管理人である田中喜市さんに、学校で講演をしてもらうことに賛成の人、手をあげてください」
おれは一人一人のクラスメイトの顔を見ていった。全員だ。全員の手があがった。③胸に熱いかたまりが突然現れたみたいに、ぼわんと熱くなる。
「ありがとうございます！」

三人で声がそろった。忍も宇太佳も満面の笑みだった。もちろんおれも。

具体的な企画についてクラスで話し合い、日程や場所を決めて、校長先生に許可をもらいにいくことになった。いちばんの問題は、誰に聞いてもらうかだ。六年生だけじゃなくて、この学校の生徒全員に聞いてもらいたいのはもちろんだったけれど、できれば親や地域の人たちにも聞いてもらいたい。

「ＰＴＡに話してみればいいんじゃない？」

と言ったのは、またしても小野田だ。小野田のお父さんが、今年度の保護者会の会長なのだ。

「そこから保護者たちに連絡してもらって、自治会の回覧板で伝えてもらえばいいんじゃない。どう？」

「ナイスだ、小野田！　今日の小野田はさえている！」

忍が大げさに言って、クラスのみんなが笑った。てっきり怒ると思った小野田は、得意げに胸を張って鼻の穴をふくらませていた。もしかして、忍のことが好きなのか？　なんて思ったけど、そんなことはどうでもいい。今日の小野田は確かに④さえている。

みんなでいろいろと話し合って、担当のグループに分かれて計画を練っていくことになった。チラシを作って、近所のスーパーや商店街、習い事先などに配ることも決めた。

「実はさ、今日の提案のために、戦争について勉強してきたんだ」

と、忍にこっそり打ち明けられた。忍らしい。どうりで、詳しいと思った。

五時間目だけでは時間が足りなくて、集まれる人だけで放課後にも打ち合わせをした。田中さんのことを、みんなに知ってもらいたい。⑤おれは、腹の底からむくむくと気力がわき上がってくるのを感じていた。

（椰月美智子『昔はおれと同い年だった田中さんとの友情』による）

問1　この場面を解説した次の文章中の［ⓐ］～［ⓔ］に当てはまる人物名やあだ名を、後のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「おれ」の名は［ⓐ］。好きだったサッカーもやめ、中学受験もあきらめた、無気力ぎみの小学六年生。そんな「おれ」と、勉強好きで中学受験をする［ⓑ］、もう一人の友人の［ⓒ］の三人は、偶然知り合った八十五歳の田中さんに小学校で講演をしてもらおうと思い、担任の［ⓓ］に昼休みに相談したところ、次の五時間目の理科の授業を使ってクラス会を開くように指示された。そして、クラスメイトに賛否をたずねたところ、すぐに賛同した女子生徒の［ⓔ］が会を仕切るようになり、反対意見を求めたところから、この場面は始まっている。

ア　小野田　　イ　忍　　ウ　トランクス　　エ　宇太佳　　オ　拓人

問2　――線部①「正直な気持ちを教えてくれて、どうもありがとうございます」とありますが、「おれ」はどのようなことを思いながら、この言葉を聞いていたと考えられますか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア　お前、なに出しゃばったまねしてくれているんだよ。意見を求められたのはおれだぜ。
イ　ウソ言うなよ。お前だってありがたく思ってないだろ。心にもないことを言うお前にムカつくよ。
ウ　やっぱりお前っておれのことがわかってる。おれじゃダメ。お前に任せるので何とかしてくれ。
エ　そうそうその調子。最初は下手に出ておいて、後でお前の予習の成果を見せてギャフンと言わせてやれ。
オ　類は友を呼ぶっていうけど、やっぱりお前はおれの友だちだ。おれと全く同じことを考えているのだから。

問3

━━線部②「クラスがまた一瞬、しずかになった」とありますが、「また」とあるので、このクラス会ではすでにクラスのみんなが沈黙したことがあった（┅┅線部「クラスが一瞬しんとして」）ということがわかります。これらに関する次の⑴・⑵の問いに答えなさい。

⑴ ┅┅線部の沈黙はどんな状態をあらわした沈黙ですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　あまりにも率直な気持ちを述べた発言だったので、クラスのみんなが思わず共感している。
イ　あまりにも想定外すぎる発言だったので、クラスのみんなが戸惑い言葉を失っている。
ウ　あまりにも常識はずれの発言だったので、クラスのみんなが嫌悪感を覚え無視している。
エ　あまりにも平凡な内容の発言だったので、クラスのみんなが呆気にとられてしまっている。

⑵ ━━線部②の沈黙はどんな状態をあらわした沈黙ですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　あまりにも理路整然とした発言だったので、クラスのみんなが反論できないでいる。
イ　あまりにも興味深い発言だったので、クラスのみんなが話の続きを聞きたがっている。
ウ　あまりにも理解しがたい発言だったので、クラスのみんなが理解するのに時間がかかっている。
エ　あまりにも思いのこもった発言だったので、クラスのみんなが引き込まれてしまっている。

問4 ――線部③「胸に熱いかたまりが突然現れたみたいに、ぼわんと熱くなる」とありますが、このときの「おれ」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちが正しかったということがクラスのみんなによって証明されてうれしく思うと同時に、なかなか自分たちを認めようとしなかった者に対する怒りも湧いている。

イ 自分たちのことをやっとクラスのみんなが認めてくれたのでほっとし、このあとのことはすべて自分たちに任せてくれという自信が芽生えている。

ウ 自分たちの思いがクラスのみんなに通じたことに達成感を覚えるとともに、クラスのみんなの思いをありがたく思い感動がこみ上げている。

エ 自分たちの意見をクラスの者がみな受け入れてくれたことに感謝し、今後のことはクラスのみんなに任せておけば大丈夫だという安心感が生まれている。

オ 自分たちの願いをクラスのみんなが聞き入れてくれたことが信じられず、何が何だかわからないながらも重大な責任を負い緊張感が高まっている。

問5 ――線部④「さえている」とありますが、「小野田」のどういうところを「おれ」は「さえている」と思ったのですか。わかりやすく説明しなさい。

問6　線部⑤「おれは、腹の底からむくむくと気力がわき上がってくるのを感じていた」について、あるクラスでは次のように話し合いました。以下を読んで、後の問いに答えなさい。

先生　この「気力」って、もちろん「田中さん」を知ってもらうために講演会の準備を頑張るぞという「気力」だけれど、それは「田中さん」に対するあこがれから出たものだってことはわかるよね。「　　」って「おれ」は言っているのだから。この気持ちは君らもわかるよね。自分がすごい人だと思い、あこがれている人が、もし誰にも知られていなかったら残念だよね。多くの人に知ってもらいたいって思うよね。でも、この場面では「田中さん」自身が出て来ないので、今一つピンと来ないのでは？　以下の、父と兄が戦死したこと、空襲で母と妹が亡くなったこと、自分も大けがを負ったことなどを講演会で述べた後の、質問コーナーの記述も参考にして、「おれ」がここまであこがれる「田中さん」ってどんな人なのかを考えてみようよ。

「一年一組の上野朋香です。田中さんの好きな食べ物のことです。わたしも田中さんと同じで、チョコバナナが大好きです。お祭りのときは、必ず買ってもらいます。田中さんがチョコバナナが好きだと知って、うれしくなりました。田中さんは、チョコバナナのどこが好きですか？」

かわいい質問に会場は笑い声があふれた。ナイス質問だ、一年生！　目の付け所がいい。おれは心のなかでほめたたえた。

「上野朋香さん、どうもありがとう。チョコバナナ、本当においしいよね。このあいだの五月の花林神社のお祭りのときに、はじめてチョコバナナを食べました。甘くて柔らかくてきらきらしていて、まるで夢を食べているようでした」

田中さんが答えると、和やかな笑いが起こった。おれは、お祭りのときにチョコバナナを見て、きれいだねえ、と言った田中さんの顔を思い出した。戦争の話では泣かなかったけど、今のチョコバナナの話にはなぜか視線がにじんで、田中さんの姿がぼやけてきた。

生徒A　大人ってよく自分の苦労話を持ち出して子どもを説教するよね。でも、「田中さん」は戦争の残酷さを体験しながらもそれを持ち出して子どもを説教することなく、「おれ」たち子どもに対し、自分と同じように未来に向かって前向きに生きるように諭してくれる存在のように思えるな。

生徒B　悲しいことがあったからといって、ずっと悲しいことが続くわけではなく、そのうち楽しいことにも出会えるさ、一生懸命生きていれば、と「田中さん」が「おれ」たち子どもを励ましてくれているように思うよ。親に同じようなことを言われても「田中さん」ほどの悲しい体験をしていないので、心に響かないよね。

生徒C　「田中さん」は他の大人たちと違って、「おれ」たちのような何も知らない小学生に対しても、子ども扱いせず、同じ目線に立って、話してくれたり話を聞いてくれたりする人だと思うよ。だから、「おれ」は親には話せないことでも、「田中さん」の前ではきっと気軽に話していたんじゃないのかなって思うけど。

生徒D　大人、特に年寄りは古い価値観にとらわれて、それを「おれ」たちのような子どもに押しつけようとするけれど、「田中さん」はそうではなく、好奇心を持って今を生きることが大切だよと言っている人なんじゃないかな。八十五歳にして初めてチョコバナナを食べ、味わっている「田中さん」の姿、想像できるよね。

生徒E　ささいなことで感情が揺れてしまい、うまく表現できないことが多い「おれ」と違い、常に落ち着いており、表現力も豊かな「田中さん」だからこそ、戦争をまったく体験していない子どもにも戦争のことをわかりやすく話してくれると「おれ」が思ったように、戦争の語り部として最高の人だよね。田中さんは。

(1)　□に当てはまることばを本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

(2) ━━━線部「ナイス質問だ」とありますが、「おれ」はなぜそう思ったのですか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア　「田中さん」の戦争の話を聞いて、重苦しくなった会場の空気をなごませようとする質問だったから。
イ　戦争の話をして悲しみがよみがえった「田中さん」の気持ちを軽くすることのできる質問だったから。
ウ　戦争体験者としてだけでなく、「田中さん」そのものに興味をもっていることがわかる質問だったから。
エ　戦後の食糧難（しょくりょうなん）に関する話を「田中さん」の口からくわしく聞けそうな質問だったから。
オ　よくわからない戦争の話ではなく、わかりやすい食べ物について「田中さん」に聞いた質問だったから。

(3) 生徒Ａ～Ｅのうち、先生の問いに対して**明らかに誤った発言**をしているのは誰ですか。記号で答えなさい。

三

次の文章は、ホンソメ（魚の一種ホンソメワケベラのこと）の研究に関するもので、筆者たちはこれまでにホンソメにも鏡に映った自分を自分だと認識すること（鏡像自己認知）ができることを発見しています。よく読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で本文の一部を省略しています。

ヒト(注)は鏡を見ればすぐに自分だとわかる。その際、基本的には自分の顔を見て認識している。［　a　］ヒトは相手が誰(だれ)かを認識する際、相手の顔を見てしている。ヒトにとって顔は、相手を識別するのに大事な場所なのである。

では、ホンソメはどうやって鏡の自分を自分だと認識するのだろうか？　ヒトと同じなら、ホンソメも鏡を見て自分の顔だとわかり、顔で鏡の姿が自分であると認識するはずである。それとも魚独自の方法でするのだろうか？　何せ魚はヒトとは分類的にも最も遠い動物群であり、我々にとって未知の方法があるのかもしれない。

①そこでまた実験である。ホンソメがヒトのように自分の顔で鏡像自己認知するとの仮説から検討しよう。ヒトの顔は一人一人違(ちが)っており、その違いで個体識別している。ホンソメが［　b　］顔で鏡像自己認知や他者の認知をしているなら、その顔に変異があると予想される。ホンソメの顔をよく見るとそばかすのようなシミがあり、それが個体ごとに違っていたのだ。思ったとおりである。

Ⓧまずはこんな実験をしてみた。まずは自分の写真と未知の他個体の写真を用意し、ホンソメに見せたのだ。鏡像自己認知ができるホンソメは他個体を攻撃(こうげき)するが、自分の鏡像は攻撃しない。もし、ホンソメが自分の写真を自分だと認識できるなら、見たことのない他個体の写真は攻撃しても、動きのない自分の写真を攻撃しないはずだ。実験の結果は予想通りで、ホンソメは未知の他者の写真は激しく攻撃したが、自分の写真はほとんど攻撃しなかった。自分の写真を自分だとわかっているようだ。

Ⓨさらに実験をした。自分の顔だが体は知らない他者の合成写真、逆に知らない他個体の顔だが体は自分という合成写真を作り見せてみた。もし、ヒトのように顔で自分を認識するなら、自己顔他者体の写真は攻撃しないし、他人顔自己体の写真は全身が他人の写真の場合と同じくらい激しく攻撃するはずである。結果は予想通りで、ホンソメは

自分の顔の写真は攻撃せず、他者顔の写真は激しく攻撃したのである。この結果は、ホンソメは顔で自分を認識していることを明白に示している。

②これは大変なことになってきた。というのもこれまで動物がどのようにして鏡の自分を認識するのかは、［　c　］わかっていないのだ。チンパンジーでもわかっていない。ヒト以外の動物で鏡像自己認知をいかにしているのかがわかったのは、ホンソメのこの実験が初めてなのだ。鏡像自己認知のやり方がヒトと魚で同じだったのだ。これはどういうことだろうか。

ヒトには自分の顔というイメージ（鋳型）が頭にあり、鏡に映る自分の顔を鋳型と比べ瞬間に自分だと認識している。自分の顔の鋳型がないと自己認識はできない。ヒトは見た相手の顔を頭の中の鋳型と比べ瞬時に相手が誰なのかを認識している。そして相手を特定するのとほぼ同時に相手に関する情報もついてくる。だからこそ、出会った相手にどのように振る舞うべきかがわかり、自然にそう振る舞うことができるのである。

ではホンソメはどうだろう。鏡に映る姿や自分の写真を自分だとわかる。ホンソメも自分の顔のイメージを持ち、その鋳型と比べ瞬時に自分かどうかを認識しているのだ。ホンソメは他個体の場合も相手の顔の鋳型と比べて認識することがわかっている。ホンソメの自己認識や他者認識のやり方は実はヒトと変わらないのである。

普段、ホンソメは1匹のオスが複数のメスを囲うハレム社会で暮らしており、体長に基づく順位関係がある。自分より順位の高い個体に出会えばその瞬間に劣位の姿勢をとり、低い相手には優位の姿勢をとって威張るのである。相手の識別とほぼ同時に相手との社会関係のイメージが出てくるから、この社会的振る舞いが自然にできるのだ。こうなると、ヒトの社会行動とその基本はかなり似ていると思われる。

ホンソメは自分や他個体の顔イメージのほか、他者に関する個別のイメージも持っている。さらに、寄生虫を取り除こうとするように目的や意図した振る舞いもしている。このように、イメージを持って振る舞いができるのは「内面的自己意識」と呼ばれる精神状態であると言える。この意識を持つ時、その動物に「こころ」があるとして差し支えない。つまり、③魚のホンソメにはこころがあると言えるのだ。

④ホンソメが鏡像を自分だとわかるとはどういうことだろう。自分だとわかるのは、本能でも単なる学習でもない。ホンソメが「考えて」自分だと理解したのである。理解するためには様々な情報が必要だ。ホンソメは鏡像自己認知をする前に何度も繰(く)り返し自分かどうかを確かめる行動をしている。この行動はチンパンジーをはじめ、鏡像自己認知できる他の動物でも報告され、鏡像と自分の動きの同調性を確認していると考えられている。ホンソメもこの確認行動は「ひょっとしたら自分かな？」、と鏡像と自分の動きの同調性を確かめているのである。そして、我々の未発表の研究結果からいうと、［　d　］ホンソメではこの確認行動をしているある瞬間、「俺(おれ)か！」と一気にわかるようなのである。

このわかる瞬間というのは、思考しているから起こるのである。我々も例えば数学の問題を解いていて、その解が得られた瞬間「わかった」という感覚を伴(ともな)ってわかる。あの「わかる感」がどうも魚にもありそうなのだ。この辺りの実態は今後の大きな研究課題である。

（『生きものは不思議』所収　幸田正典(こうだまさのり)「魚も鏡の姿を自分とわかる」による）

（注）ヒトは鏡を見ればすぐに自分だとわかる――ヒト以外にもチンパンジー・イルカ・ゾウ・カラスの仲間はそれができることがわかっている。

問1　本文中の［　a　］～［　d　］に当てはまることばの組み合わせとして最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　a　たとえば　b　本当に　c　少ししか　d　おそらく
イ　a　なるほど　b　かりに　c　少しも　d　いよいよ
ウ　a　そもそも　b　もし　c　まったく　d　どうも
エ　a　意外にも　b　たとえ　c　絶対に　d　何となく

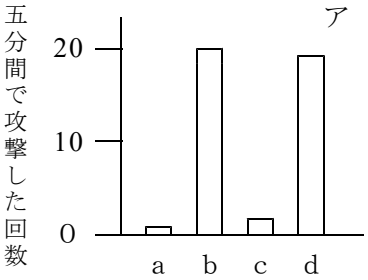
問2　線部①「そこでまた実験である」とありますが、筆者たちはその実験として線部Ⓧ とⓎ の実験を行っています。次の(1)～(3)の各問いに答えなさい。

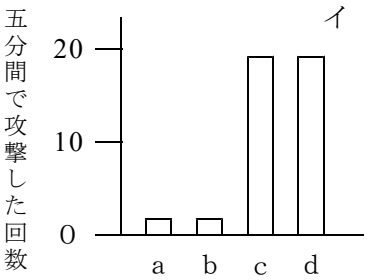
(1)　線部Ⓧについて。この実験はどういうことを確かめるために行ったものですか。次の文の（　　）に当てはまることばを、指定された字数で本文中から抜き出して答えなさい。

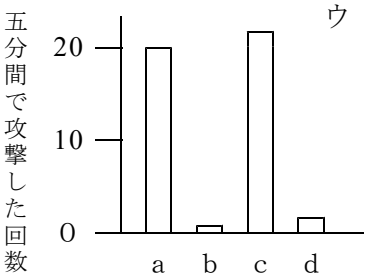
（A　五字　）だけでなく、（B　　十字　　）でも（C　四字　）することを確かめるため。

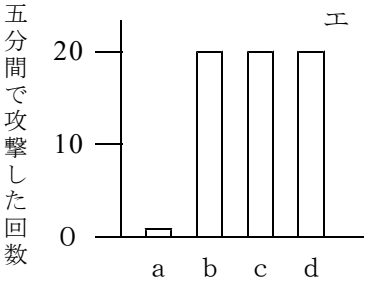
(2)　線部Ⓨについて。この実験はどういうことを確かめるために行ったものですか。答えなさい。

(3) ═══線部Ⓧ とⓎ の実験の結果をまとめて棒(ぼう)グラフに表すとどのようになりますか。最も適当なものを次のア～エのグラフの中から選び、記号で答えなさい。ただし、グラフのaは自己写真の場合、bは他者写真の場合、cは自己顔他者体の場合、dは他者顔自己体の場合をそれぞれ示します。









問3

線部②「これは大変なことになってきた」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア　ヒトも魚も鏡像自己認知をしているというこの実験結果は、進化の研究の上で未知の発見につながる画期的な成果だということ。

イ　鏡像自己認知を進化の上で劣（おと）る魚がしているという事実は、ほ乳類の頂点に立つヒトの現在の地位をおびやかすことになる可能性があるということ。

ウ　同じやり方で鏡像自己認知をする仲間に魚までもが加わったので、ますます研究に複雑さが増してしまって困ったことになったということ。

エ　魚がヒトと同じやり方で鏡像自己認知をするということは、ヒトの社会的振（ふ）る舞（ま）いについて根本から研究しなおす必要性がでてきたということ。

オ　分類上、ヒトとははるかに遠い魚でも鏡像自己認知のやり方が同じだということのもつ意味合いが、とんでもなく大きいということ。

問4

線部③「魚のホンソメにはこころがあると言える」とありますが、そう言えるのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問5

――線部④「ホンソメが鏡像を自分だとわかるとはどういうことだろう」とありますが、筆者はこの問いにどう答えていますか。その答えをまとめた次の文の（A）・（B）に当てはまる適当なことばを、本文中から抜き出して答えなさい。ただし同じ記号には同じことばが入ります。

ホンソメが（A　　）を得るための行動を繰り返し、得られたその（A　）を用いて（B　　）する過程のなかで「理解できた」という瞬間がホンソメにはあるということ。

問6

ホンソメの認知研究の結果は、今後どのようなことにつながると考えられますか。次の【参考文】を読んで、解答欄に当てはまるように答えなさい。

【参考文】（本文と同じく「魚も鏡の姿を自分とわかる」中にある文章です）

ヒトは自分のことを「自分」と認識しているし、誰もが自分には「こころ」があると実感している。自分が存在しているという自己の実感がないと、たぶん普段の社会生活はできないだろう。では動物はどうだろう。実はこの問いに答えるのはかなり難しい。

近代哲学の父と呼ばれるデカルトは、人間は精神と肉体とからなると捉えた。彼は、ヒトの精神には自己や「こころ」はあるが、動物にはそれらはないと考えた。この考えはその後の近世西洋哲学の基盤となり、現在まで続いている。

デカルトがヒトだけが自己やこころを持つと考えた根拠は、言語を持つヒトだけが自己の存在を認識できる「自己意識」を持つとみなしたことにある。逆に言語を持たず本能に基づく紋切り型の行動しか取れない動物は、自己を振り返ることができず、自己意識はないとした。この考えに基づいて、現在でも動物とは異なり自己意識を持つヒトは特別な存在だ、とする考えが主流である。